

59 頭痛における¹²³I-IMP SPECTの有用性

山尾房枝, 矢形智絵, 申 昇求, 山尾 哲 (倉敷中央病院 内科) 長木昭男, 清川文秋, 山本修三, 河原泰人 (同 R I センター)

神経学的所見および頭部MRIに異常所見の認められない頭痛患者41例に、¹²³I-IMP SPECTを施行し、病態につき検討した。撮影は回転型ガンマカメラを用い、¹²³I-IMP静注直後から5分間持続的に動脈血を採血し、Kuhlらの方法により局所脳血流量を算定した。片頭痛では、小脳、後頭葉での血流低下頻度が高かった。緊張型頭痛では、rCBFの低下は認められなかった。慢性外傷後頭痛では、rCBFは脳全体で低下傾向がみられた。慢性脳循環不全症では、小脳を含め脳全体に血流が低下しており、病態診断に有用と思われた。¹²³I-IMP SPECTによるrCBFの測定は、頭痛の病態を検索する上で、有力な補助診断法となり得る可能性が示唆された。一部治療後のSPECTについても報告する。

60 有機溶剤依存症患者における¹²³I-IMP SPECTによる局所脳血流評価

内田佳孝、北方勇輔 (君津中央病院放射線科) 岡田真一、児玉和宏、坂本 忠、山内直人、佐藤甫夫 (千葉大学精神科神経科) 菊島 聰、岡田淳一、宇野公一、有水 昇 (千葉大学放射線科)

従来、有機溶剤乱用によって視神経障害や小脳障害が報告されているが、局所脳血流の観点から検討した報告はきわめて少ないと思われる。今回、有機溶剤依存症患者7例に¹²³I-IMP SPECTによる局所脳血流測定を行った。全例MRIにて明らかな脳萎縮等、異常所見を認めなかつたが、¹²³I-IMP SPECTによる局所脳血流測定では一例に小脳に血流低下を認めたほか、5例には前頭葉あるいは側頭葉等に血流低下を認めるなど多様な変化がみられた。特に前頭葉血流低下では意欲低下などの症状を呈している症例も認められ、臨床症状との関連が示唆された。

61 脳動脈瘤術後症例のSPECT所見

竹山英二、武山英美 (戸田中央病院脳神経外科)

神保 実、山本昌昭 (東京女子医大第2病院脳神経外科)
脳動脈瘤術後の29症例に35回の¹²³I-IMP SPECTを施行した。early imageにて25例で開頭側の脳灌流は対側より減少していた。delayed imageにおける再分布現象が不良な症例(3例)、非手術側に低灌流域を認めた症例(5例)、crossed cerebellar diaschisis(7例)を認める症例は予後が悪い傾向にあった。手術側に高灌流域を認める症例(4例)は予後が良好で術後の意識障害は無かった。前交通動脈瘤の症例に脳深部小低灌流域を認める症例(5例)が多かった。

62 TIAのSPECTによる局所脳血流量の検討

渡辺 象、上嶋権兵衛、丸山路之、鈴木美智代、大塚照子 (東邦大学第二内科) 高野政明 (同R I) 木暮 喬 (同 放射線科)

【目的】TIAにおいてSPECTにより局所脳血流量を測定し脳循環動態を検討した。【対象および方法】対象は、TIA 26例で男17例、女9例、平均年齢67.2才である。方法は、IMPを用い、SPECT装置は回転型ガンマカメラを使用して、大脳に10カ所のROIを設定して、小脳と各ROIとのカウント比の検討および視覚的評価との比較を行った。一部の症例については、キセノン吸入法もあわせて施行した。【結論】従来TIAの成因として微小塞栓説が唱えられてきたが、今回の検討では局所脳血流量の異常は責任病巣のみにとどまらず、多発性の異常を示すものがほとんどで、血流不全の関与が大であることが示唆された。

63 無症候性脳梗塞における局所脳血流量の検討

阿部晋衛、羽生春夫、新井久之、羽田野辰由、高崎 優 (東京医科大学老年科)、石井 巍、鈴木孝成、阿部公彦、網野三郎 (東京医科大学放射線科)

詳細な神経心理学的検査で異常を認めず、頭部CTやMRIにて虚血性病変の検出されるいわゆる“無症候性脳梗塞”例について¹²³I-IMP SPECTを用い局所脳血流量を測定した。脳血流量の測定にはKuhlらの持続動脈採血法に従つた。無症候性脳梗塞例の一部には、健常者に比し特に前頭葉皮質領域を中心とした軽度の脳血流量の低下を認めるものもみられた。このような軽度ながらも脳血流量の低下を認める無症候性脳梗塞の臨床的意義は不明であるが、この病態について臨床的な観点から考察を加え報告する。

64 脳梗塞における¹²³I-IMP SPECT所見と

X線CT所見の解離

丸野 広大、村田 啓、大竹 英二、高尾 祐治 (虎の門病院放射線科) 相羽 正、関 要次郎、土田 昌一 (同脳外科) 高木 昭夫、井田 雅祥 (同神経内科) 趙 圭一 (千葉大学放射線科)

脳梗塞における¹²³I-IMP SPECT像上の血流低下域(LPA)とX線CT像上の低吸収域(LDA)に大きな解離を認めた症例のうちLDAが比較的小さい36例についてその原因を検討した。脳動脈造影が行われたのは25例で、このうち15例(60%)で主幹動脈に閉塞または狭窄を認め、また動脈硬化性変化を高率に認めた。これらの症例では、慢性的な脳血流の低下がおこり、穿通枝領域に小梗塞がおこっていることが予想される。その他の解離の原因についても、神経学的所見等をLPAとLDAが一致した症例も合わせて比較し、検討を加えた。